
頑張れる理由

岩瀬馨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張れる理由

【Nコード】

N6500V

【作者名】

岩瀬馨

【あらすじ】

小説家の主人公、水谷は、ある理由から、父親を毛嫌いしていた。だが、担当の編集である白川との会話の中、水谷はその毛嫌いしていた父との共通点を見出していき……。

「ふわあああ……」

大きなあくびが、意図しないうちに出る。昨日が締め切りだと言うのに、まだ5ページくらいしか書いていない。原稿を落とすわけにも行かないし、今夜は徹夜かな。内容は大筋で決まっているし、まあ、何とかなるだろう。

作家と言う職業は、傍から見れば気楽に見えるが、その実は地獄の日々だ。締め切り間際には数日間徹夜はざらだし、家から出たくても、そんな暇なんてありやしない。今日も今日はで、俺のパートナーはいつもの煙草のみ。頭を使う仕事ゆえに、酒も菓子も音楽も、そんなものは用意していない。

二箱目の煙草を開けたところで、玄関のベルが鳴る。

「開いてるよー、どうぞー！」

「失礼しまーす」

ドアを開けて入ってきたのは、俺の担当、白川さんだ。俺よりも3つほど年下で、俺が作家になってから5年以上の付き合いになる。時々忙しいときは買い物とかしてきてくれるし、担当と言うより、気の置けない友人という表現のほうが近い。他の作家がどうなのかは知らないが、何年も一緒にやってると、こんな感じになるのだろうか。

彼女はなにやら細長い紙袋を提げて、俺の向かっているデスクのすぐ横に立つ。

「さっきお電話したときは死にそうな声でしたけど、大丈夫ですか、水谷さん？」

”島田悟”というペンネームで作家をやっているが、彼女は本名

である水谷で俺を呼ぶ。最初のころはペンネームだったが、長く仕事をやっているうちに、それが違和感になっていったのが理由だ。友人に本名で呼ばれることがないっていうのは、やっぱり変だからな。

「ああ。電話が来るまで水も飲まずにいたら、すっかり声が枯れちゃってさ」

「……あまり無理はしないでくださいね？体壊したりしたら大変ですから」

無理をしているのは、仕事に追われているからだ。ってことは、無理をさせてるのはそっちの会社では、と聞きたくなる。

「そうだ、差し入れを持ってきましたよ」

そう言う彼女、例の長い紙袋の中からなにやらビンを取り出す。その中に見えるのは、褐色の液体とどろろを巻いた、……ってあれ？

「それ見れば大体予想がつくんだけど、それは？」

「ハブ酒ですっ！実家からいっぱい送ってきたんですよ！」

語尾にハートが付きそうな勢いで彼女は答えた。というか人にあげられるほど沢山送ってくるのか、あんたの実家は。

「これで精力つけて、一気に書き上げちゃってくださいっ！」

「……あのさ」

俺は作業を中断して、とりあえず酒が創作の邪魔になることだけ説明しておいた。いろいろと気が利いて、とてもいい人なんだけど、少々天然過ぎるところがあるのも事実だ。

「……」

「……………」

俺の後ろにあるソファーに腰掛けつつ、白川さんはじっと俺の作業を見ている。その目線が程よいプレッシャーとなり、知らず知ら

ずのうちにペンが進む。白紙の原稿用紙が、一枚、二枚と埋まってゆく様が、妙に心地よい。いつしか今月分の原稿の大半が終わり、後は物語の×部分を考えるのみとなった。

「さて、ちよつと休憩……」

俺が振り返ると、白川さんはソファ―に座ったまま、小さな寝息を立てていた。

「はあ。まったく、何をしに来てるんだか」

俺が書き始めてから2時間も経っているのだ、眠くなってしまうのも無理はない。だけど、若い女の人が、こうも無防備に寝ていていいのか？

ふんわりとしたゆる巻きの髪、透き通るような肌、長い睫毛、整った顔立ち。いつの間にか凝視している自分に気付き、あわてて目をそらす。

「やれやれ。風邪引いても知らないぞ？」

奥の部屋にしまつてある毛布を持ってきて、起こさないように掛けてやる。

「っていうか、何で俺、こんなに気を使ってるんだよ？」

近所迷惑にならない程度に窓を開けて、煙草に火をとます。あともう一息、もう少し頑張れば、今月分の原稿が終わる。

「えっ!？」

「うわっ!？」

そんな風に二十分くらい原稿と格闘していると、突然白川さんが飛び起きた。

「なっ、ど、どうしたんだよ、突然っ!？」

「えっ……。あ、ごめんなさい」

呆然としている彼女の瞳からは、一筋の涙が流れ落ちていた。

「ごめんなさい。ちよつと、父のことを思い出してしまいました」

「親父さん？」

「ええ。父は大学の教授だったので、ペンの音と煙草のにおいで、

つい……」

「だった？今は違うのか？」

「はい。父は二ヶ月前に他界しまして、それで、少しだけびっくりしてしまっただけです」

二ヶ月前といったら、つい最近の話ではないか。なるほど、思い出してしまうのも無理はない。

「すみません、中断させちゃって。続けてください」

「は、はあ……」

涙をぬぐって笑顔を見せる白川さんに促され、俺はとりあえず作業を続行する。

「……親父さんのこと、尊敬してたんだ？」

「はいっ！」

自信を持つて、白川さんは大きく首を縦に振った。そんな様子に、ふと俺の脳裏に親父の姿がよぎる。浮かんでくるのは、彼女とは違う、仕事ばかりで俺やお袋に冷たく接してきた姿ばかりだ。

「うらやましいな。俺の親父は、そんな風に自信を持つて尊敬できる、なんて言える人じゃなかったからさ」

「そう……なんですか？」

「ああ。親父も、俺と同じ作家だったけど、親父はお袋にも俺にも、父親らしいことなんて何もしてこなかったんだよ」

「作家だったんですか？」

「それほど売れてはいなかったけどな。家計を支えていたのは、お袋だったよ」

「でも、今作家をしているってことは、尊敬していたのでは？」

「尊敬、ね。そんなことはなかったと思うけどな」

「そうなんですか？でも、そんな……」

寂しそくに呟く白川さんを見無視して、俺はペンを走らせる。しばらくの間二人とも無言だったが、やがて白川さんが静寂を破った。

「水谷さん。水谷さんは、何で作家を続けてられるんですか？」

「何でって。そりゃあ、仕事だから」

「そうではなくて。やりがいですよ。やっぱり、仕事ができるのって、やりがいだと思うんですよ」

「やりがいねえ。そう聞かれると、ぱっと出てくるものじゃないかなんとか感じているものなのだろうけど、いざ聞かれると意外に出てこないものだ。そんなことを話しているうちに、原稿の最後の一行を書き終えた。」

「ふう。終わったよ。軽く読んでみてくれる？」

「あ、はいっ！」

書き終わったばかりの原稿に、白川さんがゆっくりと目を通していく。いつものこととはいえ、やっぱり緊張する一瞬だ。

「……………。すごいですね、やっぱり水谷さんの書く小説は、面白いです！」

「ありがとう。でも、ほとんど売れてないんだよな？」

「でも！私、水谷さんの小説のファンですから！」

「ファン…………？」

その言葉を聞いて、過去のこと脳裏によみがえる。

どうしようもない駄目親父だったけど、その親父の小説を一番絶賛していたのは、他ならぬ俺ではないか。親父はきっと、それを糧に仕事を頑張っていたのだろう。……では、俺は？俺は何を糧にして、仕事をしているのか？

「俺、わかった気がするよ」

「え、何がですか？」

「やりがいだよ。俺が仕事をこつとして続けていられる理由も、親父がずっと作家を続けていた理由も」

俺は小さく息をついて続ける。

「やっぱり、見えない沢山の人に好かれるより、目の前で喜んでく

れる人がいるほうが、ずっと力になるってことさ」

「目の前、ですか？」

「ああ。たぶん親父も同じだったんだと思う。考えてみれば、親父の小説を一番喜んで読んでいたのも、俺だったからさ」

こうして書き終えた小説を、いつも喜んで読んでくれる人がいる。当たり前前の光景の中に溶け込んでいて、普段はまったく気付かないでも心の奥でやりがいを感じている瞬間。

「ありがとう」

「えっ！？」

突然お礼を言われて、何がなんだかわからない様子の白川さん。

「白川さんが喜んでくれるのがうれしくて、俺はめげずに作家を続けていられるんだと思う。白川さんが言ってくれる『すごい』とか『面白い』とかの言葉ひとつひとつが、俺のやりがいだよ」

白川さんの顔が、どんどん赤く染まっていく。その様子を見て、俺はどれだけ恥ずかしいことを口走ったのか気付き、俺もまた赤くなる。

「あ、えっと、ごめん。俺、超恥ずかしいことを……」

「い、いえっ！格好いいです！……えっと、私でよければ、いえ、私はずっとファンですからっ！」

全力の笑顔でガッツポーズをしてみせる。

「だから次は、締め切りに間に合うように進めてくださいねっ！！」

またもや語尾にハートが付きそうな口調で、彼女は一番厳しい言葉の口にするのだった。

そのあと、朝までしばらくいろいろなことを話していた。彼女が始発で帰った後、俺はおもむろに携帯を開く。電話帳から目的の番号を探し出し、発信ボタンを押した。朝が早い人だから、おそらくもう起きているだろう。

「……ああ、もしもし、親父？」

共通点なんて無いと思っていた俺と親父、その実は共通点だらけだった。それに気付いた途端、過去の家庭を蔑ろにしていた親父のことなんて吹っ切れていた。きつとお袋も、そんな親父に愛想を尽かしていたんじゃないかと、黙って支えていくつもりだったのだろう。その朝、俺は久々に、人生の先輩である親父といろいろと話した。

『でも！私、水谷さんの小説のファンですから！』ついさっき、白川さんに言われた言葉と、『俺、親父の小説は一番だと思っからさっ！』十年以上前、まだ幼かった俺が親父に向けて言った言葉。なんとなく気恥ずかしくもあり、それでいて、何よりもうれしい言葉。

同じ作家と言う道に入った今、俺は親父と同じ立場に、立てているのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6500v/>

頑張れる理由

2011年8月16日03時10分発行